



瀬戸蔵ミュージアム

“せともの”という言葉の発祥の地である瀬戸。この地で生まれたやきものと、生産の場や道具、そしてそれらを取りまく情景をとおして、千年余りにおよぶ瀬戸のやきものの歴史と文化を体感するミュージアムとして平成17年3月に開館した。

当ミュージアムは複合施設瀬戸蔵の2階と3階に位置する。2階は瀬戸のやきものづくりを象徴する、かつてのやきもの工場や石炭窯、煙突、せともの屋の店先、やきもの輸送の中心であった旧尾張瀬戸駅などの建物群を復元。3階は猿投窯を起源として時代とともに多彩な変化を遂げた瀬戸焼千年の歩みを実物資料で紹介する約30mのパノラマ展示で紹介している。

目 次

● 愛知県博物館等職員研修会	2
● 第32回東海三県博物館協会研究交流会	3
● 「平成19年度部門別研修会」の報告	4
・自然科学部門研修会・歴史民俗部門研修会・美術部門研修会	

愛知県博物館等職員研修会

平成19年度愛知県博物館等職員研修会は、平成19年10月4日（木）、5日（金）の2日間、知多市研修センター南浜荘を主会場として開催された。この研修会は知多市歴史民俗博物館がホスト役を勤め、参加者は37名に及んだ。1日目は、「リピーターを呼べる常設展示」を研修テーマとし、いつ来てもかわり映えない常設展示、来館者にもう一度来て見ようと思わせるような展示の工夫についてグループワークを通して考えるものとした。



本題に入る前に、長年、知多地方の教員を勤められた吉田弘先生をお迎えし、特別講演会「知多半島西海岸の風物詩」と題し、映像を交えながら知多地方のご紹介をいただいた。続いて、

岐阜市歴史博物館の土山公仁学芸員から、「岐阜市博物館リニューアル」と題して、平成16年度に常設展示を大幅に改良した岐阜市博物館の事例をお話いただいた。そのリニューアルの



コンセプトとして ①「楽市座」を復元するなど戦国時代にウエイトをかける ②体験メニュー、コーナーを設置し、体感型、体験型の展示をする ③展示品の解説、来館者の体験メニューの補助などにボランティアを導入するの3点を掲げたことについてその解説をいただいた。

その後、この研修のメインイベントであるグループワークに入る。4、5人ずつのグループに分かれ、「リピーターを呼べる常設展示」について自館の例、他館の例、また自らのアイデア等を紹介し合った。これが結構白熱し、35分の制限内では話し足りないようであった。これまでの研修パターンである、「人の話を聞く、何かを見る」という域から脱却し、今回は、各自が「自ら述べる」という積極参加型の研修を試みたものである。その後、各グループの代表者が討議内容の発表をした。

良いアイデアを紹介しあうことによって、情報が共有され、全体のレベルがアップすればこの上ないことと思う。終了後は、交流会で親睦を深めた。



翌、2日目は、視察研修として「とこなめ焼き散歩」を訪ねた。「散歩道案内人」と呼ばれるボランティアガイドさんの案内により1時間半ほど歩く。この散歩道には常滑焼の土管や器、破片などがそこかしこに使われているのが見える。家の土台、壁、道、溝、崖などいたるところに利用されている。ガイドさんの楽しい説明に、皆、感心しながら聞き入っていた。普通ならそのまま通り過ぎてしまうような所も、ガイドさんの説明により意外な発見があった。最期に、知多市歴史民俗博物館を見学して無事この研修会の幕を閉じることができた。

（知多市歴史民俗博物館 石川秀男）



第32回 東海三県博物館協会研究交流会

東海三県(愛知・岐阜・三重)の博物館関係者が一同に会して交流を深めるとともに、それぞれの館(園)が抱かえる課題などについて事例発表や意見交換をおこない、今後の博物館活動の充実・発展に資する恒例の研修会を三重県で開催した。

◎平成19年10月23日(火)

会 場 ウェルサンピア伊賀

参加者 63名 愛知県12名

岐阜県13名

三重県38名

テーマ:「協働する博物館活動」

－仲間と取り組むウチの館(園)の活動－

今後、博物館活動をより充実・活発化するために、さまざまな関係者・団体との協働が一層必要となる。今回の研究交流会では、博物館と関係者・団体とが協働して取り組んでいる事例に学びながら、会員各館(園)の状況を相互に紹介して研修と交流を深める。

① 岐阜県の事例発表

「人からまなぶ、人を通して伝える」

美濃加茂市民ミュージアム

館長 可児光生

② 愛知県の事例発表

「商店街との連携事業について」

名古屋市博物館

主査 塚本松市

③ 三重県の事例発表

「技術や知識を還元する連携」

鳥羽水族館

営業 高林賢介

④ グループ別意見交換会

◎10月24日(水)

現地調査・伊賀地域の会員館園の視察

来年度(第33回)は愛知県において開催される予定。



「平成19年度部門別研修会」の報告

＜自然科学部門研修会報告＞

自然科学部門研修会は、平成20年2月7日（木）、一宮市博物館において「学校教育（教科）と連携した学習教材及び展示の開発と実践」をテーマに開催された。一宮市博物館で開催されている「くらしの道具展」小学生レクチャーのようすを見学することから始まり、事例発表が4講演と、研修参加館の事例発表が8館と、非常に充実した内容であった。自然科学部門の研修会ではあるものの、どの博物館にも共通するテーマであるため、35館49名と多くの参加者が出席した。

■「くらしの道具 ～今と昔～」展 レクチャーの様子を見学

一宮市博物館では、市内学校の見学時には事前打合せを必須としており、生徒たちは必ず予習をしている状態で見学に訪れる。ガイダンスでは、『何故歴史を学ぶのか？』という問いかけから始まり、テストのためではなく“先人たちから失敗と成功を学ぶこと”そして今回の企画展「くらしの道具展」での見学ポイントである“道具は適材適所で進化し、均一化された現代との比較を行う”という学習の目的の説明があった。その後“わらで刀のおもちゃ作り”を全員で行い、わらが平野部の生活において欠かせなかったことも加えて説明した。30分のレクチャーの中に、明確な目標と、飽きさせずに興味を惹きつける工夫の両方があった。



■「くらしの道具 ～今と昔～」展 における16年の展開

発表者：一宮市博物館 久保禎子氏

一宮市の学習指導要領は、博物館の方針に併せて作られており、学校教育課には博物館見学委員会という組織がある。この委員は学校教員で構成されているため、博物館と学校の連携が非常にスムーズに行える。市内公立小学校全42校が当館に見学に来るため、見学の日程等、先生との個々の調整は行わず、教育委員会側に調整をお願いしている。学校との事前打合せは、様々な状況を想定してマニュアル化されており、生徒は予習を済ませた状態で来館する。そのおかげで、全校平等にレクチャーを行うことが実現できている。

■「学校連携 徳川美術館の場合」

発表者：徳川美術館 加藤啓子氏

徳川美術館は私立館であるため、教育委員会の係と直接交渉することが出来ない。そのために、当館側が窓口を広げることで学校連携推進している。例えば、毎週土曜日の子供教室、夏休み子ども特別企画、学校団体の受け入れ、出張教室等を行っており、解説プログラム、体験タイム等を企画している。当館のスタンスとしては、定番プログラムを継続・充実させ、新しいプログラムの開発を行い、ホームページや報道にてプログラムの告知をする。そして、興味を持った教員・

教諭には積極的に対応し、来館いただいている。課題としては、積極的な告知が出来ておらず、問合せが少ないことである。現時点で教員・教諭との連携は行えていないが、ヒアリングの場を設定するための予算を確保することが出来た。



■「自然史博物館の出前授業と貸し出しセット(本物図鑑)」について

発表者: 豊橋市自然史博物館・

豊橋市地下資源館 藤原直子氏

豊橋市自然史博物館では、出前授業を2001年から開始しており、出前授業の募集はホームページで行っている。貸し出しセットには、『本物図鑑』というものがあり、テキストと標本から構成されている。ただし、標本は多数準備することが困難なため同時期に出前授業の希望が重なると学芸員の人手の問題もあり、出前授業が行えなくなってしまう。個性的なプログラムに対しては、学校側に選択してもらうことも必要。博物館に来館していただければ、レクチャーは可能で、入館者も増加する。



■「利用と連携

―事例を重ねて見えてきたこと―

発表者: 蒲郡情報ネットワークセンター・

生命の海科学館 山中敦子氏

生命の海科学館は教育委員会ではなく企画部の管轄ですが、学校との連携はワークシート作り、ミニレクチャー、出前授業、教員研修(理科教員対象)、WEB教材作成など普及活動面で行っている。ただし出前授業の45分間でどれだけ伝えることができるのか? それには限界があるため、「トレジャープラネット」というWEB教材を作成した。これは自然科学をバーチャルで学ぶもので、まずは学校で体験し、続きを自宅でも行えるシステムである。

■「わが館の事例:

研修参加者館の事例等の紹介」

事例発表では、三重大学、日本モンキーセンター、鍛造技術の館、明治村、豊田市郷土資料館、北名古屋市歴史民族資料館、碧南海浜水族館、愛知県陶磁資料館の発表があり、ガイドブック作成、ワークシート、学校団体へのレクチャー、プログラム等について紹介された。

指定管理者制度が始まって、博物館は学校以外の教育機関であることに変わり無く、博物館が楽しいところであるという認識は、幼少時から必要である。思い出に残れば、将来また来てくれるはずである。今回の研修会では、学校との連携の事例を見ながら、博物館の熱い思いを感じ取ることが出来た、有意義な研修会であった。

(名古屋市海洋博物館

南極観測船ふじ 山口真一)



〈歴史民俗部門研修報告〉

歴史民俗部門の研修会は平成20年2月21日(木)、名古屋市博物館において「文化財写真を撮る」をテーマとして、参加者25館26名で開催した。講師は名古屋市博物館の写真技師であり、奈良文化財研究所の写真研修の講師でもある杉浦秀昭氏に依頼し、撮影機材や写真を判定するための機材といった個別的な問題をはじめ、文化財写真の特性や撮影に対する考え方といった大きな問題についても、お話をいただいた。

研修は午前10時、会議室において主催者挨拶から始まった。紹介を受けた杉浦氏は研修に対する考えとして、1日研修を受けたのみで飛躍的に技術が上昇することなどはないという考えを示された。また、参加者が自身の疑問について恥ずかしいなどと思わず、時には恥をかくことがあったとしても問題を解決、共有していくことを望まれた。



その後、写真室に移動し、①立体物の撮影(箱)、②水平方向での平面の撮影(軸物)、③垂直方向での平面の撮影(和本)という順序で、基本的な方法で資料を撮影しながら、参加者が事前に提出した疑問や質問や当日提示された質問に回答する形で説明が行われた。その際、各館の設備や所有する機材を具体的に把握しながら、個々の状況に応じた方法を示された。

個別の問題については、たとえば所有する照明の数が少ない場合であっても、自作のレフ板や一般的な鏡などを利用することで、

照明の少なさをカバーできるといったことを説明された。研修全体を通じて、必ずしも最高の設備があるとは限らない状況において、今ある機材で創意工夫を重ねること、家庭用品を工夫して利用することが重要であると強調された。また、写真を判定する目を持とうとしなければ上達せず、フィルムビューアーやカラーチャートは必需品であるとされた。



①立体物の撮影(箱)



③垂直方向での平面の撮影(和本)

博物館施設での撮影全体に通じる問題として、永続的に残されていくべき文化財写真においては、オリジナルであることが強く求められることを強調された。記録や資料としての意義を強調され、デジタルデータの利用に関する留意点を説明され、資料保存について参加者が自省する機会となった。

当日、ゲストとして参加された国立歴史民俗博物館の勝田徹氏から、特にデジタルカメラの利用についてアドバイス、及び撮影から利用までの総合的な説明をいただいた。デジタルデータを常に管理し続ける必要があり、ともすれば撮影の簡便さ、保存性という面で優れていると思いがちなデジタルカメラの利用について、フィルム撮影と同様の技術が必要であり、それらを含めて様々な注意点や有効な方法について説明された。

冒頭で記したように、杉浦氏は「今回の一日限りの研修によって、撮影技術が飛躍的に上昇するとは考えていない。むしろ、各参加者が撮影技術を上達させるためのきっかけであり、いつでも参加者の相談に乗り、指導していきたい」と述べられた。このような言葉は、文化財写真を撮影され続けてきた30年間の経験を広く伝え、生かしていきたいと望む杉浦氏の考えに基づくものである。

(名古屋市博物館 長谷川洋一)

〈美術部門研修会報告〉

■「手づくりホームページの改善」

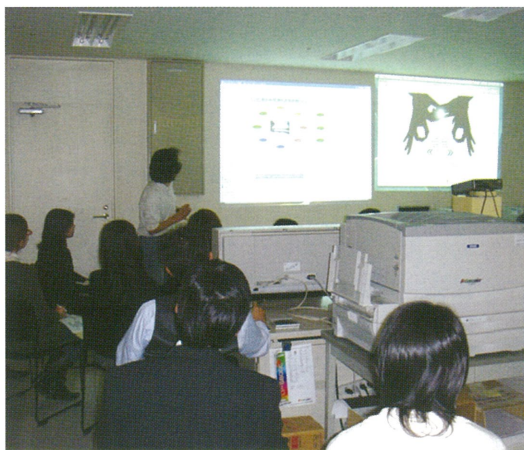
デザイナーの伊藤敦志氏を講師に招いて、2月14日に愛知県美術館の事務室で「HPを良くするためのコツ」と題して、美術部門の研修会を行った。19館23名が参加した。



伊藤氏はナディアパーク関連でグラフィックデザインも行う若手のデザイナーである。あくまでグラフィックの延長線で行う彼のHPは、フラッシュやCGLを使ったりせず、きわめて我々が見やすく情報にアクセスしやすいシンプルなもの、我々が取り組むことに

なる手作りHP、そして日常的なデザインの参考になる。研修への参加締め切りをした段階で、伊藤氏と各館のHPを検討することにした。市役所のHPのレベルと同じもの、あるいは手作りの素朴さが残るものが多い。そこで、素朴さを感じさせるものを、少しでも、デザインが意識されたものへと変えることはできないだろうか、という点を伊藤氏と相談した。更には、その中から、美術分野から稲沢市荻須記念美術館、歴史分野から大府市歴史民俗資料館、自然の分野から鳳来寺山自然科学博物館のHPの作り変えを、伊藤氏にお願いすることにし、研修会で提言してもらうようにした。

伊藤氏が提案されたデザインの基本は、三つの「そろえる」で構成されている。①「レイアウトをそろえる」②「色をそろえる」③「デザイン表現をそろえる」である。他にもさまざまな「そろえる」が紹介されたが、これらの原則を守れば、手作り感が薄れていき、こなれたデザインに近づく。これに加えて伊藤氏が紹介されたのが、基本的なHPデザインのアプリケーションに用意されている「テーブル」システムで作る方法であった。この「テーブル」を利用した方が、素人でも作りやすく、手作り感は消える。また、併せて、「トップページのところに一番知らせたい情報と相手に必要な情報を載せる」と「常にHPが更新されている感覚を与える」というポイントも伊藤氏は指示された。



10分の休憩をはさんで、今度は参加館のHPを一つ一つ全員で見ている、それぞれの館がHPの考え方を説明することにした。各館の関心が集中したのが、「どのようにして、HPを上手に更新して新しい情報を提供していくか」である。外部委託の場合には更新に時間差もできるし、コストもかかる。反面、内部で更新すれば、統一されたデザインに狂いも生じてしまう可能性がある。

しかし、今では、初期に数百万円の設計料がかかるものの、その後は館の担当者が更新可能なプログラムを作ることができることもわかった。また、友の会などのブログを経由して、美術館の最新の情報を提供する苦肉の策も紹介された。さらに、行政側の困った要請も紹介された。例えば「ユニバーサルデザインの考え方による、音声読み上げソフトに対応するHPであること」「アプリケーションを使用せず、HTML言語でHPを作ること」「テーブルシステムを使用しないこと」等である。

研修会に参加した各館は「デザインに困っている」という初歩的なレベルで悩んでいたのではなくて、自由度がないことに悩みを抱えているのである。公立館を中心にして、HPに関する問題をそれぞれが深刻に抱え込んでいたことが明らかになり、問題が共有された。この意味で、この研修会は実に有意義であった。

(坪戸雅彦 愛知県美術館主任学芸員)

稲沢市荻須記念美術館
Inazawa City Ogisue Memorial Art Museum

ホーム
利用案内
一般展示室のまよし
拡張展示室
拡張展示室
拡張展示室
特別展・企画展
国内派遣作品所蔵数調査
販売物

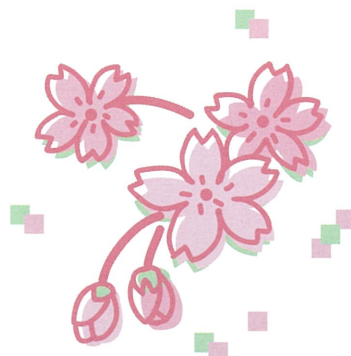
Latest News
2008/02/13
●●●●●更新しました
2008/02/13
●●●●●更新しました
2008/02/13
●●●●●更新しました
2008/02/13
●●●●●更新しました

稲沢市荻須記念美術館
〒462-0317
愛知県稲沢市荻須365番地
Tel: 0567-42-3300
Fax: 0567-42-3302
© Inazawa city ogisue memorial art museum 2008 all right reserved

特別展・企画展
三都の女展
一東京・京都・大阪における近代女性表現の展覧会
2007年10月13日(土)～11月11日(日)
北野国史(館長) 1982年 東京国立近代美術館
このたび、稲沢市荻須記念美術館では、稲沢市立竹島美術館、高岡市タワー美術館との共同企画として、明治末期から昭和初期にかけての東京、京都、大阪の3都における女性表現の展覧会を開催します。
近世においても女性を題材として描くことは、浮世絵・文楽の領域だけでなく、西洋画においてもたびたび見られますが、近代女性を描く上には、社会・文化・政治・経済の状況が大きく関係しています。近代に入り、明治末期の女性立への動き、国家主義への反発と社会主義思想の広がりによる社会の改革や階級への意識など、近世にない女性意識が顕著になります。そのなかで、明治末期から昭和初期にかけての東京、京都、大阪の3都における女性表現の展覧会を開催します。
>>> 詳細はこちらから

一般展示室のまよし
子ども絵手紙コンテスト展
2007年2月15日(金)～2月17日(日)
北野国史(館長) 1982年 東京国立近代美術館
このたび、稲沢市荻須記念美術館では、稲沢市立竹島美術館、高岡市タワー美術館との共同企画として、明治末期から昭和初期にかけての東京、京都、大阪の3都における女性表現の展覧会を開催します。
>>> 詳細はこちらから

講師 伊藤氏が提示されたHP(例)



「愛知の博物館」No.87

発行日 平成20年3月31日
編集・発行 愛知県博物館協会

〒489-0965

愛知県瀬戸市南山口町234番地

愛知県陶磁資料館内

TEL(0561)84-7474

FAX(0561)84-4932